

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四糸金吾殿御返事

ほつけぎようじやじゆうしよ こと

（法華行者住処の事）

新版
1624
〜
1625

しじようきんごどのごへんじ ほつけぎようじやじゆうしよ こと

四条金吾殿御返事（法華行者住处の事）

こうあん ねん がつ にち さい しじようきんご

弘安 3 年 ('80) 10 月 8 日 59 歳 四条金吾

とのおか こめおく た そうろう ことししちがつ うらぼんく そうぜん

殿岡より米送り給び候。今年七月、孟蘭盆供の僧膳に

そうろう じし そう りようぜん ちようしゆ ぶつだ しんめい のうじゆ

して候。自恣の僧、靈山の聴衆、仏陀、神明も、納受・

ずいき たも っ こころざし れんれん おんとぶら ことば

随喜し給うらん。尽きせぬ志、連々の御訪い、言をも

っ

って尽くしがたし。

なん どの ごしようぼだいうたが なにごと

何となくとも殿のことは後生菩提疑いなし。何事よりも

ぶんえいはちねん ごかんき とき すで さがみのくにたつ くち くびき

文永八年の御勘気の時、既に相模国竜の口にて頸切られん

とき との うま くち っ かち はだし な かな

とせし時にも、殿は馬の口に付いて足歩赤足にて泣き悲し

たま

ことまこと

はら切

けしき

み給いし、事実にならば腹きらんとの気色なりしをば、い

よ

おも

わす

つの世にか思い忘るべき。

さど

しま

はな

ほっかい

ゆき

した

う

それのみならず、佐渡の島に放たれ、北海の雪の下に埋も

ほくざん

みね

やまおろし

いのちたす

覚

としごろ

れ、北山の嶺の山下風に命助かるべしとおぼえず、年来

どうほう

す

ふるさと

かえ

たいかい

そこ

千引

の同朋にも捨てられ、故郷へ帰らんことは大海の底のちび

いし

おも

ぼんぷ

ふるさと

ひとびと

こい

きの石の思いして、さすがに凡夫なれば古郷の人々も恋し

ざいぞく

みやづか

ひま

み

きよう

しん

きに、在俗の宮仕え隙なき身に、この経を信ずることこそ

きう

さんが

しの

そうかい

へ

はる

たず

きた

たま

希有なるに、山河を凌ぎ蒼海を経て遥かに尋ね来り給いし

こころざし

こうじよう

ほね

くだ

せつれい

み

な

ひとびと

志、香城に骨を砕き雪嶺に身を投げし人々にも、いか

でか劣り給うべき。また我が身はこれ程に浮かび難かりしが、
かなりけることにてや、同十一年の春の比、赦免せられて鎌倉に帰り上りけん。

つらつら事の情を案ずるに、今は我が身に過あらじ。あ

るいは命に及ばんとし、弘長には伊豆国、文永には佐渡の

島、諫曉再三に及べば留難重畳せり。「仏法の中の怨な

り」の誠責をも、身にははや免れぬらん。

しかるに、今、山林に世を遁れ道を進まんと思ひしに、

人々の語様々なりしかども、かたがた存する旨ありしによ

とうごく

とうざん

い

しちねん

しゅんじゅう

おく

つて、当国・当山に入つてすでに七年の春秋を送る。ま

み ちぶん

お

ほけきよう

かとうど

なん

た身の智分をばしばらく置きぬ、法華經の方人として難を

しの きず こうむ

かんど

てんだいだいし

こ

にちいき

忍び疵を蒙ることは、漢土の天台大師にも越え、日域の

でんぎようだいし

すぐ

とき

ゆえ

伝教大師にも勝れたり。これは時のしからしむる故なり。

わ み ほけきよう ぎようじゃ

りようぜん

きようしゆしやか

ほうじよう

我が身、法華經の行者ならば、靈山の教主釈迦、宝淨

せかい たほうによらい

じつぼうふんじん

しよぶつ

ほんげ

だいじ

しやつけ

世界の多宝如来、十方分身の諸仏、本化の居士、迹化の

だいぼさつ

ぼんしやく

りゆうじん

じゅうらせつによ

さだ

みぎり

大菩薩、梵釈・竜神・十羅刹女も、定めてこの砌におわ

みず

うお住

はやし

とりきた

ほうらいさん

しますらん。水あれば魚すむ。林あれば鳥来る。蓬萊山に

たまおほ

まれいせん

せんだんしょう

れいすい

やま

こがね

いま

は玉多く、摩黎山には梅檀生ず。麗水の山には金あり。今

ところ

ぶつぼさつ

す

たも

くどくじゆ

みぎり

この所もかくのごとし。仏菩薩の住み給う功德聚の砌な

おほ

つきひ

おく

どくじゆ

たてまつ

ほけきよう

くどく

り。多くの月日を送り読誦し奉るところの法華經の功德

こくう

あま

まいとしたびたび

ごさんけい

は、虚空にも余りぬべし。しかるを、毎年度々の御参詣に

むし

ざいしよう

さだ

こんじよういっせ

しょうめつ

は、無始の罪障も定めて今生一世に消滅すべきか。いよ

いよ、はげむべし、はげむべし。

じゆうがつようか

十月八日

にちれん

かおう

日蓮

花押

しじょうなかつかさのさぶろうざえもんどのごへんじ

四条中務三郎左衛門殿御返事